

まきどき・植えどき・収穫どき

# どきどき情報 5月

## 野菜の作業

**気象変化の激しい時期です。保温・換気・かん水に気を配りましょう！**

種まき・植え付け	栽培管理のポイント
<p><b>播種</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ホウレンソウ</li> <li>・コマツナ</li> <li>・チンゲンサイ</li> <li>・ダイコン</li> <li>・カブ・ニンジン</li> <li>・モロヘイヤ</li> <li>・スイートコーン</li> <li>・エダマメなど</li> </ul> <p><b>植え付け</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・トマト、ナス、ピーマン、キュウリ</li> <li>スイカ、オクラ</li> <li>ズッキーニなどの果菜類</li> <li>・ネギ、ハクサイ、キャベツ、パセリ、セルリー、ブロッコリー</li> <li>サトイモ</li> <li>ナガイモ</li> <li>サツマイモなど</li> </ul> 	<p><b>【エアダマメの栽培方法】</b></p> <p><b>【特徴と生理・生態】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・エダマメは、タンパク質やビタミンAやCなどを豊富に含んだ栄養価の高い野菜で、元来は盛夏の野菜であったが近年は冷凍物を含め年間を通じた需要があります。本県においては6～10月まで出荷されており、そのピークは7～9月の夏秋出荷となっています。しかし、この時期は市場販売では単価が最も安くなる時期でもあるので味の良さや良質品種などで競争力を付けることが重要です。</li> <li>・栽培管理は、他の野菜に比べると楽であるが収穫調整に労力を要すること、収穫適期が1週間程度と短いため、収穫調整労力が1回のは種量を決めるポイントとなります。生育適温はサイズが概ね25～30ですが、早生種が大部分を占めるエダマメでは、高温すぎると生育が抑えられのりそれよりもやや低めの温度が適しており、特に日気温格差が大きい場合には着莢が良好となります。</li> </ul> <p><b>【作型と品種】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本県での作型はハウス、トンネル、露地栽培（マルチ）に大別されますが、気象条件からみて早くても4月中旬定植の6月どり（トンネル栽培）とします。トンネル栽培では定植をできるだけ早める反面、生育中期から着莢期までの間に徒長させたり過繁茂にしない管理が重要です。生育前期は低温期であるため被覆材の利用により凍霜害を防止するとともに高温障害を防ぐことが重要で、特に生育中後期は気温が急上昇するため徒長させないよう換気に注意します。定植後30～35日頃の開花期までは被覆して保温をし、着莢率を高めます。開花中の気温は25前後が目安で10以下と30以上にならないように管理します。露地栽培では、品種の使い分けが必要で4月は種、7月上旬どりでは極早生種を、7月中旬どりでは早生種を使います。また6月上旬は種の9月どりは良質多収の中晩生種を用います。なお、マルチやトンネルにより開花期や収穫期を早めることも可能です。</li> <li>・品種は、温度と日長に対する反応から夏サイズ型、中間型、秋サイズ型に大別され、秋サイズ型品種は早まきしてもある程度の短日にならないと開花・結実しないが、夏サイズ型品種は日長を感じる事がすくないので早まきし温度を保てば順調に成熟するので、実際の栽培では早生種（夏タイプ）や若干の影響を受ける中生種（中間品種）を用います。エダマメは、風味と香りがよく、2～3粒莢の着莢で鮮緑色、毛じは白で少ない品種が好まれますが、近年では食味も重視され、在来系茶豆の「ダダチャマメ」や「丹波黒」のエダマメ利用なども増加しています。</li> </ul>

## これからは種する作りやすい花の栽培

### 《ひまわり》

キク科の植物で、花形、花色、草姿も豊富になり花壇から鉢植え、切り花など幅広く利用されています。生育期間が短くは種後、45～60日前後で開花することから、切り花時期を設定してからは種期を決めることが大切です。

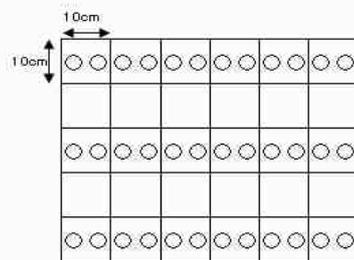
（は種期は、5月上旬～7月上旬が目安となります。）

- ・畑は、あまり肥沃でない排水良好なほ場がよく、前作に作物を栽培した場合は無肥料とします。無肥料でスタートした場合は、生育の状況により葉面散布を行います。

- ・は種床の作り方と栽植密度については、60cm幅の床を作り、10cm5目のフラワーネットを張り、図のように1・3・5目の列に1マスに二本立ちとなるようには種し、1坪当たり150本を標準とします。



- ・は種は、は種前までに土を手で握ってひび割れが入る程度に散水しておき、覆土は 1cm 程度とし、表面を少し鎮圧します。発芽適温は 20~25 度で、発芽後の生育適温は 20~30 前後が理想です。
- ・フラワーネットは、生育に応じ草丈の半分くらいまで上げます。
- ・病害虫防除は、ヨトウムシやアブラムシ類の他、うどんこ病、黒斑病に注意します。



は種方法と栽植密度



## 農業豆知識

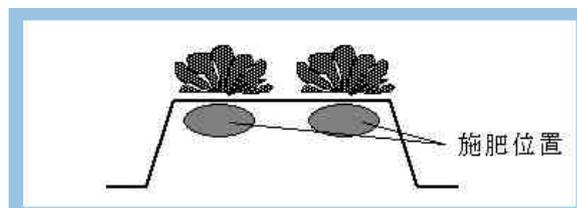
### 野菜の局所施肥法とは？

野菜栽培では、ほ場全体に肥料を散布しローターで作土層全体に混入させる「全面全層施肥」が、一般的な施肥法です。この「全面全層施肥」では、肥料を作物の根が分布していないところまで施用することになります。従って肥料のロスが多く、雨水やかんがい水により溶脱して環境に負荷を与えているとの指摘がありました。一方、作物の根群には肥料を効果的に吸収する能力の高い部分があります。その根の近くに肥料を限定してやれば、肥料の利用率は大幅に上がり、環境への負荷も少なくなります。

このように、肥料を作土層の一部に局在させる施肥法を「局所施肥法」といいます。

しかし、この方法では部分的に肥料の濃度が高くなり、作物の根が障害を受けやすくなるといったリスクもあります。そのため、作物に適した施肥位置を把握することと、肥料成分の溶け出しぐあいをコントロールできる「肥効調節型肥料」(LPコート、被覆肥料、IB化成、CDUを含む肥料等)を用いることが求められます。

さて、多くの野菜が畦を立てて定植します。その畦立て時に肥効が緩やかで濃度障害が起こりにくい肥効調節型肥料を、苗を定植する位置周辺の土壌のみに集中的に施肥する技術を「畝内局所施肥」といいます。



ほ場全体で畦面と通路部分のしめる面積を考えると、従来の「全面全層施肥」にくらべて、通路部分の施肥量を減らすことができます。

しかし、この施肥法は、省力的に大面積で行うためには専用の施肥機が必要になります。畦立てと併せてマルチングを行う機械にこの施肥装置を組み合わせた機械が使われます。

この機械では、肥料を土中に注入していくことから、土壌の物理的な条件や水分状態で混ざりぐあいが変わり、生育が不安定になるという心配もあり、微妙な調節求められます。

さらに、土壌が低温で乾燥気味だと、溶け出す肥料の量が少なく、肥効が劣ることから初期生育が悪くなるという心配もあります。そこで、あらかじめ速効性の肥料を少量土壌混和した後に、局所施肥法を組み合わせ、初期の生育を安定させるやり方が望ましいとされています。



果菜類では、苗の段階で育苗培土に肥効調節型肥料を混合して育苗し、本ばに定植するという「ポット施肥法」が使われるようになってきています。果菜類は作期が長いので、用いる肥料も被覆燐硝安加里というような長期にわたって肥効のあるものが用いられます。

定植時に同様の肥料を植え穴に全量基肥として施す技術も普及されるようになってきました。きゅうりでは 100 日なり、140 日タイプの被覆燐硝安加里(「エコロング424」など)を用います。

植え穴、1 穴当たりの施肥量は、窒素分量を基準に次式により決定します。

$$\text{[1 穴当たり施肥量]} = \text{[本圃慣行施肥量の 3 割減肥した量]} \div \text{[定植株数]}$$

肥料の計量では、内径 40mm 程度の塩化ビニルパイプなどを切断した計量容器を作成して、正確に入るようにします。植え穴に肥料を入れ、その上に軽く間土をして苗を定植します。殺虫剤などの粒剤を植え穴に処理する場合は、間土を入れた後に行き土壌と混和しておきます。

このように局所施肥法により施肥量を減らすとともに、環境に負荷を与えない方法での野菜づくりも進めていきたいと思えます。